幼妻は、白い結婚を解消して国王陛下に溺愛される。

アルフォンス・フォン・オーレンシア
国王。正妃である母を冷遇した父を嫌悪しており、エリーゼを気にかけるのも、母と似た境遇だからと思われたが……
エリーゼ・コルベール
お飾りの侯爵夫人とされてしまった元伯爵令嬢。自分より周囲を優先しがちな性格だが、意志は強い。
アラン・コルベール
エリーゼの夫。幼妻として嫁いできた彼女に見向きもしなかったが……
タニア
アランの愛人。元踊り子で、アランとは結婚前からの付き合い。
レナ
エリーゼの侍女。侯爵家に仕える人間だが、全面的にエリーゼの味方である。
エリック・ラガルド
エリーゼの義兄でアルフォンスの側近である侯爵家嫡男。何かと苦労人な愛妻家。
ルイズ・ラガルド
エリーゼの姉でエリックの妻。おっとりとした優しい性格。
フェルナンド・リュシドール
エリーゼの兄である伯爵家嫡男。飄々としているが、根は真面目で家族思い。
Characters
登場人物紹介

【プロローグ】

貴族として生まれたからには、家のための結婚は避けられないものだ。

オーレンシア王国で伯爵の位を賜る、リュシドール家の令嬢として産まれたエリーゼも、そのように教育をされて育った。ゆえにデビュタント前の十二歳であっても当然のように、政略結婚について理解をしている。

そして家のための結婚が当たり前となっているこの国の貴族令嬢達に、根強い人気を誇っているものの一つが、男女のロマンスを描いた恋愛小説だ。エリーゼの趣味は読書であり、本なら特に選り好みはあまりしない。薬草学や服飾関連、旅行記、地歴、哲学、そして経済学など、実に様々なジャンルの本を、幅広く読み耽るのが日課となっていた。当然のように流行のロマンス小説も読了済みであり、周りの令嬢と同じようにエリーゼも、本を読みながら胸を高鳴らせた。

特にエリーゼは伯爵家の庭園にある四阿で、本を嗜む事を楽しみにしていた。季節の花々に囲まれた、木漏れ日の降り注ぐ庭園は、心地のいい風と穏やかな時間を満喫する事が出来る。

お気に入りの場所で、ロマンス小説を読み見終わった直後、余韻に浸りながらエリーゼはふと

思った。恋愛結婚は現実的でなくとも、結婚をした後に信頼関係を築き、そこから愛が芽生える夫婦だって少なくないはずだ。

実際にエリーゼの姉ルイズは政略での婚姻を既に済ませており、他家へと嫁いでいる。夫となったラガルド侯爵とは、仲睦まじい様子がエリーゼから見ても一目で分かる程で、理想の夫婦と言って過言ではなかった。

だからきっと、自分も姉夫婦のような素敵な関係をいつか、結婚相手と築けるはずだと未来に思いを馳せていた。

ある日エリーゼは、いつも仕事で忙しそうにしており、姿を見る事すら滅多にない父、エドゥアール・リュシドールこと、リュシドール伯爵が現在、邸に帰っていると知った。そしてその父親が自分に、書斎へ来るように言っていると、使用人から言付けられたのだった。

叩扉の後、重厚な本棚に覆われた室内に足を踏み入れ、父と向き合う。執務机に向かうエドゥアールはすぐに本題を切り出した。エドゥアールから告げられたのは、エリーゼに縁談が持ち上がったという内容であった。

幼くして婚約者が決まるのは、貴族社会で珍しい事ではない。

だが未だ会った事のない男性と、この縁談がまとまってしまえば、後に自分達は夫婦となる。頭では分かっていても、なんとも言えない感覚に囚われ、心が騒ついた。ぼんやりと思い描いていた未来が、急に現実となってエリーゼの前に現れたのである。不安に思わないと言えば嘘になる。

相手はエリーゼの八つ歳上で、すなわち二十歳の立派な大人だと聞かされる。その事実がエリーゼにとって一番気掛かりな部分だった。大人になってしまえば、気にならない年齢差でも、現在は大きな隔たりがある。

しかしいくら自分が納得出来なくとも、貴族令嬢に過ぎないエリーゼには、伯爵家の当主である父の決めた事に対して、当然拒否権はない。

不安と僅かな期待と、色んな感情を混ぜ合わせた思いを胸にエリーゼは父に向けて一言、「分かりました」と返事をした。

両家の顔合わせの日は早々に決まった。エリーゼの覚悟が決まる余裕もなく、その日の朝は緊張で、あまり朝食が喉を通らない程だった。

侍女達の手によって髪を梳かしてもらい、少し落ちついた色味とデザインのドレスが選ばれる。着替えさせられたのは、ネイビーのドレス。

準備が整うと、父に連れられ馬車に乗りこんだ。晴れ渡る景色の中馬車は進み、しばらく揺られながら到着を待つ時間は、通常より長く感じた。空の色とは反対に、エリーゼの表情は晴れない。

馬車が高い門をくぐり、車窓からは広い庭園が見える。そして庭園の中央には、歴史を感じさせる立派な邸がそこにあった。

ここはエリーゼの縁談相手、コルベール侯爵家の邸である。コルベール邸へとエリーゼが足を踏み入れるのは、これが初めてとなる。

リュシドール親子は馬車から降りると、出迎えてくれた使用人に案内され、玄関ホールへと入った。

通されたのは、沢山の人を呼べるように作られた、広めのサロン。

長椅子にエドゥアールとエリーゼは並んで腰掛け、邸の主人を待つ。しばらくして現れたのは、コルベール侯爵とその嫡子アラン。

エリーゼの見合い相手であるアランは、黒髪に緑色の瞳が印象的な美丈夫だった。騎士らしく引き締まった身体には、程よく筋肉がつき、武骨さは感じられない紳士的な印象を受ける。

エリーゼは事前に、絵姿でアランの容姿を確認していた。見合い用の絵姿とは、多少美化して描かれる事が普通であり、全く当てにならなかった事例も多数知っている。

だがアランに限っては、絵よりも実物のほうが良く見える程だった。

それぞれが挨拶を済ませると、エドゥアールとコルベール侯爵が話し始める。

二人の会話を聞きながら、エリーゼはアランのほうに視線を向けた。

結婚後の二人の姿を想像してみようとしたけれど、あまりにも漠然としすぎていて、難しかった。けれどこの方が、自分の将来の夫となるかもしれない、いや、当主二人の話しぶりからして、その未来はほぼ確定事項だろう。まだまだ不安だけれど、悲嘆してばかりではいられない。そう思って

エリーゼの向けた視線は、緊張と照れくささと、期待とを混ぜ合わせたものだった。

ふいにアランも真正面のエリーゼのほうを向いた。視線が合った事に驚くエリーゼだったが、彼が明らかに不機嫌そうな表情を浮かべている事に気づき、固まってしまう。

「……っ！」

明らかに不服な態度を隠そうとしないアランだが、萎縮してしまうエリーゼに対し、更に苛立ったように鋭利な視線を向けた。

（どうしましょう……コルベールのご子息は私が気に入らないのか、このお見合いの場自体が不服なのだわ……）

戸惑うエリーゼに異変を感じたのか、エドゥアールとコルベール侯爵が不思議そうに二人を見比べる。

「どうかしたか？」

エドゥアールに問われ、アランはすぐに柔らかな表情を浮かべた。

「いえ、何でもございません」

あまりの豹変ぶりを見せるアランの態度は、更にエリーゼの不安を煽ったのだった。

コルベール家での見合いから帰るとすぐ、エリーゼはエドゥアールに訴えかけた。アランがエリーゼに対し、不満を持っている可能性が高い事、そして出来ればこの縁談を断ってほしい旨を伝

えたのだ。
だが、分かってはいたが、エドゥアールには微塵も聞き入れて貰えなかった。
エリーゼはもう一度、見合い時のアランの様子を思い出す。敵意ともとれる、冷たく睨みつけてくるあの瞳は、自分にのみ向けられていた。そこでふと、とある考えが浮かぶ。
（彼のあの様子なら、こちらから断らなくても、きっと向こうから断りを入れてくるはずよ）
不満があるのはあちら側なのだから、きっとこの見合いは破談になる。そう思うと、心が幾分か落ち着きを取り戻した。
その夜エリーゼは「大丈夫、大丈夫」と繰り返し心中で呟いてから眠りについたのだった。

【第一章　白い結婚の始まり】

エリーゼの予想と期待とは裏腹に、アランとの縁談がまとまってしまった。十三歳になる年に、コルベール侯爵家へと嫁ぐ事が正式に決まったのだった。てっきりコルベール側から、破談にしてくれると思っていたのに……
アランは家同士の事情により、仕方なく婚姻を結ぶ事に同意したのだろうか。もしくは、エリーゼが親の決めた物事に拒否権がないのと同様、アランも父侯爵に聞き入れて貰えなかったのだろうか。仕方ないと諦められる性格ならあの場で敵意は叩きつけてこないだろう、後者の可能性が高い。
貴族の婚姻とは、家同士の結びつきの為に行われるもの。貴族ならばそれらを理解して、態度を軟化さえしてくれれば……。しかしエリーゼの、一縷の願いは、彼女が十三歳になり婚礼が近づいても叶う事はなかった。
エリーゼが十三となると、夫のアランの年齢は、二十一歳。アランからすれば、エリーゼはまだまだ幼すぎた。また、侯爵家の跡取りであるアランは、王宮に出仕する騎士でもある。
国の騎士として働く若く健康的な肉体が、女性の体を求めてしまうのは、仕方がない事かもしれない。

そして彼には、二年前からの付き合いになる恋人がいる。酒場で出会った踊り子のタニアが、アランの相手である。

タニアはブルネットの髪のエキゾチックな美人である事に加え、豊かな胸に長い手足の持ち主だった。濃艶な魅力溢れる大人の女性である彼女に、アランは精神的にも肉体的にも彼女に溺れていた。そんな彼にとって、突然の政略結婚は、苦々しく思わずにはいられなかった。

妻となる貴族女性が、歳の近い大人の女性ならまだ我慢が出来たのかもしれないが、現実は十三歳の子供。それにエリーゼは通常の年齢よりも年下に見られる事が多く、小柄で華奢な体型がさらに、見た目の幼さに拍車をかけていた。

もっとも、それはエリーゼ側からしても同じ事が言えた。エリーゼとてまだ子供ではあるが、自慢の金糸の髪は艶やかで、青い瞳は宝石のように美しい。それに加えて、今は亡き母譲りの美貌を受け継ぎ、整った容姿をしている。同年代の少年であれば、たとえ恋する相手がいたとしても、婚約者として紹介された美少女に悪い気はしなかっただろう。また、もしもアランがエリーゼと同い年であれば、不機嫌な彼に睨まれたところで萎縮するまでには至らなかっただろう。

だが、現実として、アランにとってのエリーゼは、何の魅力もない子供であり、エリーゼにとってのアランは、年の離れた威圧感のある男性だった。

結果、アランは侯爵邸での、初めての顔合わせの時から、明らかにエリーゼに対して不機嫌を隠そうとしなかった。その態度は、幼いエリーゼを萎縮させ、顔を俯かせた。

そのためエリーゼ本来の性格は明るく朗らかなのだが、婚姻までに何度か顔合わせをしたアランの前では、常に暗い表情を浮かべる事しか出来なくなっていた。

エリーゼをよく思わないアランからすると、微笑まれたところで嫌悪感を露骨に表すのみ。それに怯えたエリーゼが暗い顔をして俯き、鋭い視線を向けるたびに肩を震わせれば、アランからエリーゼへの印象は更に悪くなる。もはや存在自体を疎んでいると言って、過言ではなかった。

こうしてエリーゼはアランから見て、陰鬱で痩せた子供として認識されたまま、コルベール侯爵家へ嫁ぐ事になったのだった。

◇　◇　◇

十三歳という幼いエリーゼに、初夜は酷だという事は誰もが思う。それでも形式として、初夜は夫婦の寝室にて二人で過ごすのが通説だ。

だがアランは結婚初日から愛人を堂々と屋敷に連れ込み、初夜は愛人との時間を過ごした。まるで今日がアランと、その愛人タニアの初夜なのだと言わんばかりに。

コルベール邸にて、エリーゼに与えられた部屋は夫であるアランの部屋へと続く隣の部屋ではなく、客間の一つ。客間の中では一番質のいい部屋なのだが、アランの部屋とは階も違う。

しかしそれはエリーゼを安心させた。

顔を合わせて露骨に不機嫌な態度をとられ、嫌な思いをするのなら、当然会わないほうが平穏だし幸せだ。

エリーゼの父であるリュシドール伯爵も、妻は夫の所有物であるという、一般的な貴族の考えを持つ。現状を報告したところで、聞き入れてくれないであろう事は目に見えている。

きっとあの父親なら『愛人くらいでつべこべ言うな、閨を共に出来る年齢に達するまで辛抱しろ』と言うのみで、何の解決にも至らないのは明白だ。

縁談が纏まってからの一年で、エリーゼは両家の状況を調べ、少なからず把握している。

コルベール侯爵家は歴史こそあるが、近年財政難に見舞われていた。そこで最近力を付けてきた、エリーゼの実家であるリュシドール伯爵家は、コルベール家に多額の持参金と、支援金を渡す代わりに婚姻を結んだ。歴史と金銭、互いにないものを持つ家同士が今後もこの国で発展していくための、典型的な政略結婚である。

思えばエリーゼの姉ルイズも、結果的に仲睦まじい夫婦となれはしたが、嫁入り先のラガルド家は、コルベール家ほどではないものの歴史ある名家だった。伯爵家の更なる発展のため、エリーゼ達リュシドール家の娘は生贄になったようなものなのだろう。

◇　◇　◇

婚姻のための調印式から一週間が過ぎ、歩み寄りの姿勢を全く見せない夫アランとのコルベール邸での生活に、エリーゼはある程度の妥協と割り切りを覚えていた。

コルベール邸でエリーゼが私室として使っている、客間の扉がノックされる。

「奥様……あの、お食事をお持ち致しました」

「ありがとう」

エリーゼは読んでいた本から顔を上げた。

本に夢中になっていたが、気付けば侍女のレナが、食事を持って来てきてくれる時間となっていた。

レナは真っ直ぐな栗色の髪に、可愛らしい顔立ちをした侍女である。まだほんのりと、あどけなさが残っている。歳はエリーゼとあまり変わらないように見え、強いて言うならば二、三歳ほどレナのほうが年上といったところか。

エリーゼが自室で食事をとるのは、今日が初めてではない。何度かダイニングで、アランと共に食事を取った事もあったが、その時も彼の側には愛人、タニアの存在があった。

しかもそれは食事の場に留まらず、アランとタニアは邸内でほとんどの時間を共にしている。また王宮での仕事が休みになると、二人で出掛ける事も頻繁であり、仲睦まじい様子が伺える。

エリーゼとは対照的な、濃艶で美しい大人の女性のタニアが、常にアランと共にある。

二人の間に入る余地は、微塵も感じられず、居心地の悪さを感じざるを得なかった。

更に今までエリーゼに対し、不機嫌な態度を取る事が常だったアランはタニアに同調し、共に馬鹿にしたような笑みを浮かべてくるようになった。これはタニアが一緒にいる時のみだが。

睨まれたり無理されたりするより、二人で嘲笑されるほうがエリーゼには余程堪えてしまった。

そのような空間で取る食事は最悪であり、何を食べても全く美味しくは感じない。

そういった経緯から、エリーゼは食事さえ夫と共に取るのを止め、一人自室で済ませるようにした。

アランがタニアと外出するのは、エリーゼとしては好都合。アランやタニアが外出している時こそ、エリーゼは屋敷の中を自由に歩く事が出来る。それ以外は二人と顔を合わせないよう、常に部屋にこもりきりである。

エリーゼは読んでいた本に栞を挟み、二つある椅子のうちの一つ、自身が使っていないほうの椅子へと、一旦本を置いた。そして、レナが配膳をしてくれるのを待つ。

テーブルの上には白いクロスが敷かれ、蒸し鶏のサラダや魚のムニエル、パン、壺に入れられたスープなどが並べられる。

（良い匂い。とっても美味しそう）

暖かな食事の香りに、エリーゼの食欲はそそられる一方だった。

レナがグラスに飲み物を注ぐ様子を、エリーゼがじっと見つめていた、その時。

レナの手がグラスへと当たった。反動でグラスはテーブルの上を転がりながら、中に入っていた水を零していく。幸いエリーゼには掛からなかったが、椅子の上に置いておいた本を濡らし、グラスは床に落ちた衝撃で割れてしまっていた。

「も、申し訳ございません!!」

狼狽しながら、レナは必死に頭を下げて謝罪する。

顔色は見る見る青ざめ、今にも泣き出しそうな彼女を安心させてあげなければ。そう思ったエリーゼは立ち上がり、レナの側まで歩み寄ると、出来るだけ落ち着いた声音で話し掛けようと心掛けた。

「大丈夫よ。本については、こんな所に置いてしまった私のほうに責任があるわ。それにこの本はもう既に、何度も読んでしまった物だから気にしないで。それより貴女に怪我はないかしら？」

「は、はいっ……、ありがとうございます、すぐに片付けます！」

レナは自身よりも歳下の主人である、エリーゼの落ち着いた対応と優しさに、大分冷静さを取り戻しつつあった。

エリーゼはこのコルベール家に嫁いで以来、アランとタニアを除く人々、つまり使用人達の優しさにとても感謝をしている。

嫁いできたにもかかわらず、夫から存在を疎まれるエリーゼを彼ら使用人はとても不憫に思い、この幼い女主人に心から尽くした。裕福な貴族家庭に育ったにも関わらず、傲慢な部分など一切感じさせないエリーゼは、使用人達と非常に良い関係を築きつつあった。

日々彼らの優しさや思いやりに感謝し、エリーゼも出来る限り、彼らに恩を返していこうと思っている。

◇　◇　◇

調印式から二ヶ月が経過した。

本日は王宮で開催される夜会に出席する為、コルベール侯爵家嫡男のアランとその妻エリーゼは、夫婦揃って会場へと向かわなければならない。

馬車に乗り込み、会場へ向かう道中、アランとエリーゼは対面で座っていた。乗った直後もアランから、さっそく露骨に嫌そうな顔をされた挙句、盛大に溜息を吐かれてしまった。

ただでさえ、夜会用に似合わないドレスを着せられ、気が滅入っていたのに、更に陰鬱にならない訳がない。

当然会話などあるはずもなく、このまま会場まで気不味い空気のまま耐えなければいけない。

ちなみに、事前に新調したエリーゼのドレスだが、妻に贈るためのドレス選びを面倒に思ったアランに変わって、タニアがオーダーした物。これも愛人からの、露骨な嫌がらせの一環なのではないかと、エリーゼは疑わざるを得なかった。

今までアランは夜会すら愛人を伴う事も多かったが、それでも最低限の社交、特に王宮が主催するような格式ばった物は妻の同伴が義務付けられる。それゆえに、今回は仕方なしに妻のエリーゼを伴うしかない。

会場へ到着し、並んで中へと入る。一歩足を踏み入れれば、眩いシャンデリアと、ふんだんに使われた蝋燭が会場中を照らしていた。夜にもかかわらず、まるで昼間のような明るさを作り出している。

それは思わず目が眩んでしまいそうな空間。

入場した途端すぐにアランは、自身からエリーゼを遠ざけた。それは引き剥がした、と言っても過言でないような、強引な動作だった。

アランはこれ以上、エスコートする事を拒否しているようだが、それはエリーゼだって同じ思いだ。

妻を知人に紹介するつもりもないアランは「そこら辺で待っていろ、勝手な事はするな」と命じ、自分は友人の元へ行って話し込んだり、綺麗な女性と踊ったりと夜会を楽しんでいた。

好奇心に駆られた、アランの友人がエリーゼに近づいて話しかけようとした場面もあった。だがアランに阻止され、それは未遂に終わった。

エリーゼはというと、同年代の友人はまだデビュタントを迎えておらず、話すような知り合いなどあまりいない。ゆえに壁の花になるべく、会場の隅で夜会の様子を眺めるしかなかった。

壁際で夜会の人々を観察していると、流行のドレス、化粧、髪型、身に着けている宝飾品の傾向を客観的に見る事が出来る。

皆流行りのドレスを着こなし、シャンデリアの下で楽団の奏でる演奏で踊る貴族女性達の姿は、とても輝いて見えた。

自分の今着ているドレスを思うと泣きたくなったが、アランの態度が軟化する事はなくとも、せめていつか彼からの感情が嫌悪や嘲笑から無関心になれば、自由に選べるものは増えるだろうと気持ちを切り替える。ここにいる女性達のような綺麗なドレスを着て、踊ったり、その頃には会場にいるはずの同年代の友人達と談笑したりするのはとても素敵な事だろうと想像し胸を弾ませた。

しばらくして小腹が空くと、用意された軽食の元へと行き、皿にいくつか料理を取った。

宮廷料理人が作る食事は当然とても美味しい。珍しい異国の料理やスイーツも用意されており、好奇心を刺激される。

エリーゼは細身ではあるが、ただ痩せこけているのではなく、適度に筋肉もあって代謝がいい。むしろ平均女性よりも食べる量は多く、好き嫌いも特にない、とても健康的な身体の持ち主だ。それに加えて成長期のせいか、最近食べる量が更に増えた気がする。

皿に取った料理を全て食べ終え、また皿に盛るという行為を繰り返し、最後には見た目も華やかなスイーツに目を輝かせた。

クリームやショコラの甘みを堪能し、エリーゼなりに夜会を楽しむ事が出来た。

狭く閉鎖された馬車内でまたアランと、対面で座らなくてはいけないのは憂鬱だったが、少なくとも夜会そのものがエリーゼにとって悪いことばかりではないと知れたのは、今後もあるだろう必要最低限の社交を踏まえれば僥倖だった。

【第二章　十六歳】

アランがエリーゼを女性として、妻として微塵も興味を持つ事がないまま月日は流れ、エリーゼは既に十六歳となっていた。

騎士であるアランは元々、仕事で遠征に行く等の理由で家を空ける事も多いが、エリーゼも今年は社交シーズンまで実家に帰ると執事を介して夫に告げた。

つまり、屋敷の主人夫妻が揃っていなくなる日が生まれるわけだが、社交シーズンでなければ特に問題はない事をエリーゼは知っていた。エリーゼの父である、リュシドール伯爵もまた多忙のため、王都の邸を空ける事が多い。現在は長男のフェルナンドが、リュシドールの邸を取り仕切っている。が、そもそもエリーゼは実家で父親の顔を見た事がほとんどなく、母もエリーゼの婚約と前後して亡くなったため、当主夫妻が不在の伯爵家が問題なく運営出来ていた事を、実感として知っているのだ。

アランも興味のない妻が家にいるよりはと、エリーゼの不在を喜んでさえいた。

コルベール家には実家に帰省中と言付けているエリーゼだが、王都にはいるものの、実際は別の場所に滞在中である。十歳才上の姉であるルイズの嫁ぎ先である、ラガルド侯爵家の邸宅に身を寄せていた。

ラガルド家の邸にあるサロン。日当たりのいい窓際の椅子に腰掛け、エリーゼは刺繍に専念していた。

「エリーゼお姉ちゃま～、このご本を読んでっ」

金髪の幼い女の子が、サロンに入った途端、エリーゼを見つけて駆けてくる。本を手にしたこの幼女は、ラガルド家の令嬢であり、ルイズの娘フィリア。天使のように愛らしい姪に、エリーゼは顔を向けて微笑んだ。

「ちょっとだけ待ってね、もうすぐ刺繍が完成するから。ほら」

完成間近の薔薇の刺繍を施したハンカチを、姪のフィリアに見せてやった。途端、フィリアはサファイアの瞳を輝かせる。

「とっても綺麗ね！」

「今度フィリアにも作ってあげるわね」

「本当!?」

「えぇ、フィリアはどんな花が好きかしら？　動物とかのほうがいい？」

エリーゼの問いに、フィリアはわずかに考えた後、元気よく声をあげた。

「う～んと、毛虫！」

「け、毛虫!?」
（それは果たして動物に分類してもいいのかしら!?　い、いえ、昆虫よね!?）
思い掛けない回答に、戸惑いを隠せないエリーゼと、キラキラとした無垢な瞳で刺繍を見つめるフィリア。
そんな二人に向かって、たった今やって来たフィリアの兄、ユリアンが呟いた。
「う〜ん、フィリアが好きなのって毛虫だっけ？　青虫じゃなかった？」
「お兄ちゃま、あの緑のヤツって青虫だっけ？」
「青虫だね」
「じゃあ、青虫！」
二人の会話を、黙って見守っていたエリーゼは恐る恐る確認をする。
「む、虫が好きなのね……フィリアは」
どちらにしても結局虫なのか。フィリアはどうやら虫が好きらしい。虫ならせめて、蝶とかでは駄目なのかと思ったが、口を噤んだ。
フィリアが希望しているのは青虫なのだ。
大切な姪の注文である。やはり現実味を追求した青虫より、可愛らしくデフォルメしたほうが喜ぶだろうかと、エリーゼは青虫の刺繍を頭の中で思い描いた。
（葉っぱに乗った青虫の刺繍……案外可愛いかもしれないわ。周りにお花の刺繍も添えて華やかに

しつつ……）
嫁ぎ先のコルベール家にいる時は、侍女達と刺繍をして過ごす事が多い。アランが家にいてなかなか部屋からエリーゼが出られない時も、侍女のレナが刺繍に付き合ってくれる。そして美味しいお茶を用意して、二人で刺繍をしながら、楽しくお喋りをして暇を潰すのが日課となっていた。
そのおかげで元々得意だった刺繍の腕を、エリーゼは更に上げていった。
刺繍は楽しく暇を潰す事が出来、満足のいく仕上がりとなった時の達成感を味わえるのが好きだ。そして何より、完成品は孤児院が併設された教会へと、寄付する事が出来る。刺繍とは実益も兼ねた、無駄のない素晴らしい趣味だとエリーゼは思っている。
エリーゼは、このラガルド侯爵家では甥と姪の、家庭教師のような役割もしていた。
姉ルイズは幼くして嫁いだ妹をとても心配し、しばらくの間自身の側に置く事を考えた。
そして子供達はとてもエリーゼに懐いている。家庭教師を任せる事で、エリーゼが気兼ねなくラガルド邸に滞在出来るようにしていた。また、この件に関して、当主であるラガルド侯爵も大いに賛成している。
侯爵夫妻がここまでエリーゼの身の振り方に介入するようになったのは、エリーゼが姉に自分の日々のドレスについて、切実な悩みを相談した事がきっかけだ。成長期であったエリーゼは、コルベール家で用意されたドレスでは、とっくに身体と合わないようになっていた。一度はアランに用立てて貰えないのかと尋ねてきたルイズだが、そもそもコルベール邸において、エリーゼの身の回

りの物を揃えるのに使われる費用は、僅かな額に減らされているらしいと知り、ルイズにとっても兄であるフェルナンドに妹の窮状を伝えると同時に、夫に頼んで社交シーズンまでエリーゼを屋敷に招いて留め置く許可を貰ってくれたのだ。

現在は主に実家の兄による手配から、身の回りのものを揃えて貰っている。それとは別に先日は、家庭教師のお給金で自分のドレスを仕立ててみた。

働いたお金で遣り繰りしながら、自分好みにドレスを仕立てるのは、実に新鮮な感覚だった。この点に至っては、エリーゼはむしろ楽しんですらいる。

エリーゼと姉の子供達が戯れている様子は、その場に光が差したように輝いていた。

ちなみにユリアンが八歳で、フィリアが四歳になったばかりだ。三人共金髪に青い瞳という、同じ色素を持ち、叔母であるエリーゼはまだ十六歳である。側から見ると、甥と姪というより三人は姉弟のように映る。

まるで天使のような三人の様子に、ラガルド家の使用人達は、眼福の眼差しで見守っていた。

フィリアに本を読んでいると、ラガルド家の執事がエリーゼを呼びに来た。

実家から、兄のフェルナンドがエリーゼを訪ねて来たのだという。

執事の案内の元、兄の待つ部屋に向かい、その扉を開ける。部屋の中にいたフェルナンドが笑顔で出迎えてくれた。

リュシドール家の兄弟は三人共とても仲がいい。

フェルナンドの向かいの席に腰をかけると、一枚の手紙が目の前に差し出された。

「手紙だよ。コルベール家のエリーゼの夫からだ」

「私に夫などいたかしら？」

『夫』という単語に、エリーゼは顔をしかめた。

実家に届いたエリーゼ宛の手紙は、こうやって兄が届けに来るようになっている。

姉のルイズがこのラガルド侯爵家に嫁いだ事で、リュシドールとの共同で立ち上げた新事業がある。その事業とはリュシドール側は伯爵ではなく、フェルナンドが取り仕切っている。

事業の打ち合わせのため、フェルナンドがこちらを訪れる事も多く、ついでにエリーゼに手紙などを届けたりもしている。

「はぁ」

フェルナンドから手紙を受け取り、内容を確認した途端、思わずエリーゼの口から溜息が漏れた。

そんな物憂げな表情でさえ、今のエリーゼの姿はとても絵になる。

十六歳となったエリーゼは身長が伸び、すらりとした長い手足。美しく括れた細い腰を持っているにもかかわらず、胸も豊かに膨らんでいる。

そして艶やかな光り輝く金糸の髪。髪と同じ金色の長い睫毛に縁取られた宝石のような青い瞳。

薄桃色の頬に薔薇色の唇。滑らかな鼻梁。

エリーゼは見事な美少女へと、成長を遂げていたのだった。
鬱々たる気分で、手元から視線を逸らすエリーゼ。手紙は、近日王宮で開かれる夜会に、妻として同伴するようにとの事が書かれてある。
アランからの手紙は、用件のみが書かれた実にシンプルな物だった。
最低限しか、エリーゼと関わる気のないアランらしい手紙。
再び溜息を吐いた、エリーゼを見ながらフェルナンドが口を開く。
「手紙の内容って、次の王宮で開かれる夜会の件かな？」
「ご名答です」
目の前のフェルナンドから『夜会』とはっきり口にされ、更に憂鬱な気分になる。
社交シーズンが到来し、コルベール邸に帰らなくてはいけない現実を直視しなければ。
エリーゼにとって、夜会自体は別に嫌いではない。
会場の絢爛な雰囲気も、美味しい料理やスイーツ、華やかな人々。
着飾った衣装や宝飾品を眺めながら、流行を把握して次に流行りそうな物を予想するのも楽しい。
このような部分だけは、自分に流れる『商売で成り上がったリュシドール家』の血が色濃いのだと自覚してしまう。
本来ならば心を躍らせる気持ちを、アランのエスコートが打ち消してくる。会場への行き帰りの馬車内で、アランと二人きりになる時間が特に苦痛だった。

そして問題は夜会に限らない。夜会以前に社交シーズンの到来は、コルベール邸への帰宅を意味する。自分でそう期限を決めていた。再びあの邸での生活が始まるのは実に億劫だ。
末妹の様子にさもありなんと笑いながら、フェルナンドはリボンが掛けられた箱をエリーゼに差し出した。
「それと、約束していた今回の夜会用ドレスが、出来上がったよ」

夜の帳が下りた頃。
ラガルド家で用意して貰っている客間の一室。傍らの手燭（てしょく）を頼りに、エリーゼは今まで読んでいた本を閉じた。読んでいたのは昆虫の図鑑。
フィリアへ、プレゼントするための刺繍の図案が決まると、そろそろ就寝時間となっていた。
灯した明かりと、月明かりが差し込む静かな室内でこれまでの事や、これからの未来について、様々な思いが頭の中を駆け巡る。夜は自然と考え込んでしまう事が多くなる。
ラガルド家にいる間、とても穏やかな時間を過ごす事が出来た。
優しい姉と義兄に、可愛いユリアンとフィリア。ラガルド家の人々には感謝してもしきれない。
姉夫婦のような家庭を持つ事に憧れていたけれど、決して自分には得られそうもない。
ならば代わりに、いつまでもラガルド家の人々が幸せな日々を過ごせますようにと。エリーゼはそう願わずにはいられなかった。

お祈りを済ませて手燭の明かりを消すと、エリーゼは寝台に入り、眠りについた。

翌朝、コルベールの邸に向かうための馬車の用意が整い、ユリアンとフィリア、そして姉のルイズがエリーゼを見送ってくれる事になった。

「エリーゼお姉ちゃま、行っちゃヤダ！」

自分のドレスにしがみ付き、駄々を捏ね始めるフィリアを見て、愛しさが込み上げてくる。それに、エリーゼ自身寂しくもあった。

「フィリア、エリーゼお姉様を困らせては駄目だ」

ユリアンはやんわりと窘めながら、エリーゼのドレスを握っていたフィリアの手を取り、自分の手と繋ぎ合わせる。

兄らしく、そして紳士的なユリアンの対応に感心しつつ、エリーゼは微笑ましい思いで小さな兄妹を見つめていた。

すると、不意にユリアンが無垢なサファイアの瞳で、エリーゼを見ながら口を開く。

「またしばらくしたら、この邸に帰って来てくれるのでしょう？」

「え、えぇっと……」

確かにこの邸での暮らしは、とても穏やかであり、安らぎを与えてくれるものだった。

エリーゼとて叶う事なら、もっとここにいたいと思ってしまう程に。

それでもエリーゼは、コルベール家に嫁いだ現実と向き合わなければならない。

コルベール家では、相変わらずの日常が待っているのか、帰宅する事で何かが変わるのか。未来の事は分からない。

何せエリーゼは、夫の事が何一つ理解出来ないのだから。今後、どのような関係を構築していくかなど、検討もつかない。

（もしかしたら、またラガルド家でお世話になる可能性もあるけれど……でも、甘えてばかりではいられないわ）

ユリアンの明るい声が、エリーゼの思索を断ち切る。

「そうだ、エリーゼお姉様に教えてもらった本、とっても面白かったです。読み始めたら止まらなくて、一気に読んでしまいました」

「まぁ、あの本をもう読んでしまったの？」

「はい、またおススメの本があれば教えてください」

「そうね、何冊かリストアップした物を手紙に認めるわ」

「お手紙、楽しみにしています。僕も必ず書きます」

「ありがとう、私も楽しみだわ。それと、ユリアンも刺繍の柄が決まったら教えてね。

「はい、馬か猫か犬で悩んでいまして……」

顎に手を当て、真剣に思案し始めるユリアンを見て、エリーゼは微笑んだ。ユリアンは動物が好

きらしく、昨日から悩み中だ。
三つくらいなら全て引き受けてもいいが、まずは最初のモチーフを決めて貰おうと思う。そして誕生日には、お勧めの本も贈ろう。フィリアにはどんな贈り物がいいだろうか。
右手はユリアンと、左手はフィリアと手を繋いだエリーゼは、改めて自身の姉、ルイズに向き合った。
「お姉様、とてもお世話になりました」
「こちらこそ、子供達の面倒を見て貰えてとても助かったわ。何かあったら、すぐに知らせてね」
「はい」
別れを惜しむ気持ちに背を向け、笑顔で姉親子に改めて挨拶と共に感謝を述べ、馬車に乗り込んだ。

車窓から流れる景色を眺め、少しずつ近づく現実が、心に影を差していく。
エリーゼを乗せた馬車が門を潜る。目を背けていた嫌な記憶と感覚が、より鮮明に目覚めていくように思えた。
コルベール邸の前で馬車が停まると、エリーゼは降り立ち、改めて邸の外観を視界に映した。
玄関ポーチに一歩踏み出して邸の扉前に立つと、すぐに両開きの扉が開き、邸がエリーゼを迎え入れる。玄関ホールに入ると、コルベール家の執事を始めとする、使用人達は揃ってエリーゼの帰

りを心待ちにしていたかのように出迎えた。
夫のアランはまだ家督を譲り受けておらず、父親のコルベール侯爵は、家の財政を立て直すため領地で奮闘している。ちなみにアランの母であるコルベール侯爵夫人は、既に亡くなっている。
アランも騎士の仕事のため、邸を不在にする事も多い。アランが不在時には必ずコルベール家に戻り、エリーゼは邸の女主人として少しでも出来る事を探して務めてきた。コルベール領にある、孤児院への刺繍の寄付もその一つである。
若く美しい女主人が帰宅すると、邸はそれだけで華やかさと明るさが増した。
ちなみに使用人達はアランの愛人を、決して女主人のような扱いはしない。
エリーゼの帰宅に気付いたのか、アランがエントランスまで出迎えに来た。サロンでわざわざエリーゼが帰宅するのを、待っていたらしい。
ただ、夫として妻の帰宅を心待ちにしていた、という訳では当然なさそうだ。
単に用があるから、それだけを伝えにきたのだ。
そして相変わらず彼の傍には、愛人であるタニアの姿もあった。
「ふん、帰ったか」
第一声がこれだった。
嫌悪感を微塵も隠そうとしないブレない態度に、エリーゼはむしろ感心してしまいそうになる。
しかしそんな不機嫌な夫アランは、エリーゼの姿をほんの少し視界に入れた途端、その目を驚きで

見開かせた。
挙句キョロキョロと辺りを見渡し、エリーゼを二度見するという奇妙な行動をとり、ついに声を荒らげた。
「!?　……なっ、だ、誰だっ!?」
とうとう顔も忘れたのかと、エリーゼは呆れを通り越して、無の境地に到達しつつある。
エリーゼの帰宅を待っていた癖に、本人を前にして「誰だ」とは、彼の頭の中はやはり理解不能だった。
「コルベール侯爵家で、形だけの妻をさせて頂いております、エリーゼと申します。別に忘れて頂いても結構ですが」
アランの「誰だ」と言った発言に合わせて、エリーゼも久々に会う夫に、わざと初対面のような挨拶をした。
そのエリーゼの声は凛としていて涼やかで、とてもよく通る。昔、アランに萎縮してボソボソと、呟くように話していたのが嘘のように。
（それにしても、私の顔を忘れてしまうほど頭が悪いのかしら？　そんな事で、これから貴族の社交をこなせるというの？　それとも、それほどまでに私に興味がないという事かしら）
しかしエリーゼにとっても、アランは最早どうでもいい存在となっているので、どっちでも良かった。むしろ興味を持たれるほうが、迷惑とも言える。

互いに興味がないといった点のみが、この夫婦の共通する部分かもしれない。
その唯一の共通点が、今この瞬間のアランに限っては崩れそうになっていた。彼の先程の奇妙な行動の理由は、目の前の美少女が、成長したエリーゼという事実に確信が持てなかったからだ。もしかしたら後ろに本物が隠れているのでは、といった可能性に対してのものだった。その落ち着きない視線と仕草は、実に挙動不審そのものである。
そして陰鬱な子供としか思っていなかった、妻エリーゼの見事な成長ぶりに、アランは未だ度肝を抜かれて、絶句中だった。
子供の成長とは早いものである。特にここ最近のエリーゼに至っては。
この三年、エリーゼはアランと邸で少なからず顔を合わす事もあるが、極力彼とは関わりたくはないので、アランがいる時は部屋に引きこもる事が多かった。たまにすれ違ったとしても、エリーゼからは話す事もなく、またアランから嫌味を言われないように顔を伏せるのが習慣付いていた。おかげでまともに顔を見るのも今日が久々だった。何か用があれば使用人を挟めばいい事なのだから。
そんなアランの内心等知る由もないエリーゼは、未だ言葉を失っている夫に不審そうに首を傾げ、不躾でない程度に周囲を見る。
現在石像のように固まっている彼の後ろには、恋人であるタニアの姿もあった。
二十七歳になった元踊り子のタニアはとっくに踊るのを辞め、ひたすら贅沢な暮らしや旅行、美

味しい食べ物、スイーツ、酒に夢中になり、移動は専ら侯爵家の馬車となっている。豊満で魅力的な身体は更に進化を遂げていた。

つまり三年前よりかなり太っていた。

定期的に、わざわざ直接嫌味を言いに来るタニアは、アランよりも頻繁に顔を合わせる機会が多い。おかげで、どんどん膨らんでいく過程を確認していたが、エリーゼがラガルド家にいる間に更に肥大した気がする。

毎日顔を合わせていては気付かない変化でも、久々に目にすると違いが明白になる。

前回会った時に比べてエリーゼは縦に伸び、タニアは更に横に伸びていた。

夫に愛情があれば、愛人の堕落はある種の喜びを生むのかもしれないが、現在のタニアの姿を見たエリーゼは、無性に悲しくなってしまった。あんなにも魅力的な身体を持って生まれたのにもかかわらず、欲と怠惰で美しさを手放してしまうなんて、と切なくなる。

人の美しさ、素晴らしさは何も外見に限った事ではなく、本質である内面こそが重要だと思っているが、それでも体型管理などは、貴族社会においても重要な部分である。そもそもタニアの場合、健康的なふくよかさとは違い、カロリーの高い食事を摂取し続け、働きもしなければ大して歩きもしない、移動の大半が馬車という結果が招いた、非常に不健康な生活の現れなのだ。

美とは健康の上に成り立つものとも言うらしい。いかにタニアが苦手とあっても、率直に健康面がかなり心配になってきているし、悪印象があって尚、魅力的な外見だと素直に思えたほど美しかったタニアが、まだ二十代にもかかわらず、それを手放してしまった事を、純粋にもったいないと感じてしまった。

加えてエリーゼには、今更な夫の不貞やタニアの嫌味より、もっと許せない事があった。それはタニアの化粧だ。他人に不快感を与えない美的感覚はマナーの一つである。

化粧はただ、塗りたくればいいものではないとエリーゼは思う。

タニアは本来美人なはずなのに、それが全く生かされていない。ギラギラと輝くラメや派手な色味が好きな事が化粧からも窺える。

それも細かく繊細な多色ラメなどではなく、大粒のラメが顔や鎖骨な腕など、肌が露出している至る箇所で、ギラギラと光を放っている。見ているだけで目がチカチカしてきそうだ。

一目見ただけで、誰しもが彼女の好みを把握する事が出来るだろう。ワンポイントに留めておけばいいものを、全てに目立つ色味やラメを配置するから、ただただ奇抜で品がなく見えてしまう。

加えて年中常に厚塗りで肌に負担をかけているせいか、乾燥していて、まだ若いにもかかわらず目尻の皺などに入り込んでしまっている。それを隠そうとして化粧直しと称し、更に厚塗りを一日に何度も重ねているように見受けられた。

タニアの化粧をエリーゼは冷静に分析していた。

以前なら他の踊り子仲間が周りにいたせいか、美的感覚がまだ平均に近かったのだろう。少なくとも今よりかは。

アランは王宮で開かれるような、正式な夜会にタニアを同伴する事が出来ない。代わりに仮面舞踏会などに二人で出席して、楽しんでいると聞く。退廃的な仮面舞踏会では、敢えて奇抜な衣装がウケるらしいが……

タニアは王都の上流階級女性に人気の、最新ファッションなどは、知る機会があまりないのか、または知っていてもあまり興味がないのか。

趣味や個性を貫くなら、せめてもう少し美的感覚が優れていれば良かったのだが。

そんな事を考えているエリーゼはただ、嫁ぎ先に帰宅するだけなので、現在は控えめなメイクをしていた。

それにもかかわらず、エリーゼの見た目は全く地味な印象を相手に与えなかった。

金糸の艶(つや)やかな髪と、同じ色の長い睫毛。滑らかな鼻梁(びりょう)や宝石のようなサファイアの瞳、白磁のような滑らかで白い肌。それらはありのままで十分に美しい。

元々の整った目鼻立ちを生かし、睫毛のキワを埋めるように細くアイラインを引き、自慢の大きな美しい瞳がより強調されている。

肌は均一に見えるように、肌馴染みのいい物を選んで薄く塗り、素顔でも十分美少女である彼女だが、ほんの少しだけ手を加えただけで更に美貌に磨きがかっていた。

素肌を美しく保ち、化粧はより肌が綺麗に見えるよう、均一に整える事がエリーゼの理念だ。

エリーゼが化粧の仕方や、化粧品そのものに興味を持ち、それだけでなく細かに研究しようとするのは、今日まで世話になっていたラガルド家に理由がある。ラガルド家が所有する侯爵領は豊かな自然により、農作物や花の産地としても有名だ。

ラガルド夫妻はとても仲睦まじく、ラガルド侯爵は自身の妻であり、エリーゼの姉でもあるルイズの美しい金髪を大層気に入っている。

愛しい妻ルイズのために侯爵領で採れる花やハーブを使用した、ヘアオイルを独自に開発しプレゼントとした。

それにすぐ目を付けたのは、エリーゼの兄フェルナンド。

フェルナンドはラガルド侯爵に、共同での事業を持ち掛け、承諾を得るとすぐにブランドの立ち上げに着手した。

まずは既に社交界で注目を浴びていた、ラガルド家開発のヘアケア用品を改良に改良を重ねて商品化。

侯爵領で採れる花やハーブのエキスが入った、優雅で自然な香りが自慢のヘアオイル。それを使用した、ルイズの光り輝く金髪を目にしたご婦人方は、こぞってそれを買い求めた。

ルイズが社交の場に出るだけで、商品は飛ぶように売れたのである。

原材料が採れるのはラガルド領。研究や改良を得意とするのはリュシドール家だった。

リュシドール家は商売で成り上がった家であり、お洒落なパッケージの加工技術や商売の手腕にも自信があった。

そのような経緯で、両家が共同で立ち上げたブランドが『フルール ドゥ ルミエール』である。
ヘアケア用品だけでなく、最近では植物由来のスキンケア、更に化粧品などの開発にも着手し始めるまでになっている。今やすっかり『フルール ドゥ ルミエール』の美容品が国内の貴婦人の間では知らない者などいない程に、成長を遂げた。
ラガルド侯爵家にいた事により、エリーゼの美容知識と、美意識は格段に上がっていったのだった。
エリーゼがタニアの身なりを十分に観察し内心嘆息した頃合いで、彼女を呼び止めておいたのにもかかわらず、言葉を失っていたアランはようやく口を開いた。
これ以上の沈黙は不自然すぎるので、何とか言葉を発して要件を言わなければいけない。
「……夜会で着るドレスを用意してあるから、後日それを着るように」
アランの言葉に、また似合わないセンスのないドレスを着させられる事を思うと、エリーゼは気分が滅入ってしまいそうだった。
「夜会用のドレスは、自分で持ってきましたから結構です」
「何？」
アランは苛立ち、眉をひそめた。せっかく用意してやったのにと言わんばかりの表情だ。分かりやすい。
何もかも理解できない相手であってもここまで分かりやすければ何の恐怖もない。エリーゼは少しも怯む事なく続ける。
「ご用意してくださったのはきっと、以前に採寸したサイズのドレスだと思われます。しかしそのサイズのドレスでは、もう私の身体では着る事ができません。ですから夜会用には改めて採寸した、現在のサイズの物を自分で仕立てておきました」
言われてアランは無意識に、エリーゼの白い胸の谷間へと自然と目がいってしまい、顔を真っ赤にさせて目を泳がせた。
「!?……そ、そうだなっ！」
暖かい季節となり、薄着になった事で上品なドレスからでも、自然と胸元の谷間が見えるようになっていた。
確かにぱっと見ただけでも、以前よりも色々と成長している。侯爵家で用意したドレスでは、着るのは難しそうだ。
夫妻の会話が一区切りしたところで、終始見守っていた執事がエリーゼに声をかける。
「奥様、お食事は如何なさいますか？」
「食べて来たから大丈夫よ」
「では、お部屋にお茶をお持ち致します」
「そうね、お願いするわ」
そう言って自分の部屋へと向かうエリーゼは背筋を伸ばし、洗練された所作を崩さず美しく歩く。

そんな女主人の姿に、使用人達は誰もが見惚れた。

ずっと子供だと思っていたにもかかわらず、すっかり美しい女性へと成長したエリーゼへの衝撃を、アランは自室に戻った後も未だ引きずっていた。

そういえばたまに屋敷ですれ違っても、俯いてばかりいるエリーゼの顔を、まともに見ていなかった。短期間であのように、見違えるほど変わるとは……確かに年齢から察するに成長期なのだから当然だ。

そして、これから更に美しい大人の女性へと成長していく事は、考えずとも分かった。

しかしまだ完全な大人ではないものの、少女の可憐さと大人の女性の狭間。両方の良さを併せ持つ、絶妙な魅力を放っていた。

そんな物思いに耽っているアランの様子を、タニアが気づかないはずはない。肩の出た光沢のある、濃い紫の寝衣をまとい、広い寝台で寝そべる彼女は、椅子に座って窓の外を眺めているアランに視線を向ける。

エリーゼが帰ってきてから、ずっとぼんやりとしているアランの事が、タニアは気に入らないでいた。

エリーゼを気にしているのかと思うと、気が気ではなかった。

それもそのはず、自分はいくらアランの恋人といえど、正式に認められたものではない。

かたや伯爵家出身のエリーゼは、国が認めたアランの正妻であり、次期侯爵夫人。

アランの今までのエリーゼへの冷遇は、年齢が子供という理由と、感情の伴わない婚姻に対しての不満から来るものだった。

それが覆ってしまっては、自分の立場は一体どうなるのか。平民の自分からすれば、貴族の義務など知った事ではない。自分の今の暮らしが脅かされる訳にはいかないのだ。

それに贅沢を知った後では、今更元の生活になど戻れるはずなどない。

痺れを切らしたタニアからの、不機嫌な声が投げかけられる。

「ちょっとアラン。少し綺麗になったからって、エリーゼを今更正妻として扱おうだなんて思ってないわよね？」

「あ、ああ……」

タニアの『今更』という言葉が突き刺さった。確かに今更だ。

タニアの考える通り、アランは成長したエリーゼの事が、頭から離れないでいた。

上品で清潔感のあるドレスを着こなし、化粧や髪型に至るまでとても品があって洗練されていた。

そんな彼女を見た瞬間、今までとても魅力的に思えていたタニアが霞み、途端に品がなく思えてきてしまった。

多少ぽっちゃりしてきたものの、その程度で長年育んできた愛情が消える事はなかったはずなのに。今までは。

だからといって結婚以来蔑ろにしてきた妻に対し、美しく成長した姿を見た途端、いきなり歩み寄りの姿勢を見せるのは、流石のアランも虫がよすぎるとは分かっている。タニアの存在もあるし、もう少し様子を見なければ……

結婚が決まった時、アランは愛する恋人がいるにもかかわらず、望まない政略結婚をさせられてとても不満だった。だからといって、それが十三歳で一人嫁いで来たエリーゼに、鬱憤をぶつけて良い理由にはならない。

妻としての役割を果たせない未熟な子供。男女の色恋などが分からないであろう幼稚な精神では、多少の理不尽など、あまり理解出来ていないと高を括っていたのも事実。

しかし今のエリーゼの眼差しは、強い意志を持つ一人の女性という印象だった。

夜が更け、湯浴みを終えたエリーゼの髪の水分を侍女が拭き取り、乾かしてから丁寧に梳かしていく。

金糸の髪は角度を変える度に光り輝くほど、艶めいていた。髪を梳かしながら、侍女は感嘆するようにうっとりと呟いた。

「エリーゼ様の髪、ますます艶々になられて本当にお綺麗ですわ」

「フルール ドゥ ルミエールのヘアオイルのおかげかしら？　あ、そうだわ。皆にもフルール ドゥ ルミエールの商品を、お土産として持って帰ってきたから、良かったら貰ってね」

化粧台の鏡越しに侍女と目を合わせたエリーゼは、持ち帰った荷物から土産を出すよう指示した。

「まぁ、よろしいのですか⁉」

エリーゼの部屋は、若い侍女達の声で賑わっていた。

この家の使用人と、エリーゼの関係は依然として良好だ。

本日までラガルド家に滞在し、しばらくの間邸を不在にしてしまったが、エリーゼの帰りを皆が喜んで迎えてくれた。

自分達と、気さくに会話を楽しむ女主人が邸を不在にすると、彼ら使用人達はそれだけで寂しく感じてしまう。

だからこうして帰って来てくれるだけで、彼らの仕事に対する意欲は格段に上がる。皆がエリーゼのお世話をこぞってやりたがる程に。

早速侍女達は、指示通りエリーゼの荷物から土産を出していく。

ヘアオイルの入った半透明のボトルや、石のついた缶に詰められたクリームなどが、テーブルに並べられる。

オーレンシアの貴族女性に大人気で、王都であっても常に品薄状態となっている『フルール ドゥ ルミエール』の商品を前に、侍女達は夢中になって吟味していた。

彼女達に商品を説明しながら、エリーゼは、一つ重要な事を口にする。

「ハンドクリームは、男性の分もあるから配っておいてくれる？」

「畏まりました」

冬になると特に、手の乾燥で痛そうにしている使用人をよく見かける。男性には香りが少ない、薬用のハンドクリームを選んでおいた。これで少しでも、皹や痛みを和らげてほしい。

侍女たちが部屋を後にすると、それと入れ替わりでレナがハーブ水を持って来てくれた。二人でしばらく談笑をして過ごす事にしたので、ハーブ水はレナの分も追加した。レナは特に仲の良い侍女であり、お互いの近況報告や他愛のない話で花を咲かせた。エリーゼはラガルド邸での出来事を話し、レナにはコルベール邸の様子を教えてもらった。

しばらくすると、レナも侍女用の部屋に戻り、私室にはエリーゼ一人きりとなった。

静寂の中で一人、物思いに耽っていると、この家で過ごした思い出が、じわじわと蘇ってくる。まだ背が低かった頃のエリーゼからすれば、大人の男性であり、長身のアランが不機嫌に睨んでくるのは、それだけで恐怖を覚えた。心ない言葉を投げられると、当然傷つく。怖れと不快感は、胸に深く突き刺さっていた。

何故人は嫌な記憶ほど、鮮明に覚えているのだろうか。

過去は変えられず、記憶を消す事は叶わない。息を吐き、深呼吸をして古い記憶を一旦頭の隅に追いやってから、今日の事を改めて振り返った。本日帰宅して、久々にアランと会話をしたが、毅然と話す事ができたように思える。

化粧は女の武器だと聞いた事があるけれど、その通りだと実感した。ほんの少し化粧を施しただけなのに、俯かずに向き合う事が出来るなんて。

少しでも良い現状に変えるために、これからも顔を上げて生きていきたいと、そう心から思った。

コルベール家に戻ったからには、夜会への出席を放棄する事は出来ない。

いつもの如く、アランと馬車で二人きりにならないといけない事実を思えば、すぐに気が滅入りそうになる。しかし普段なら開催日が近づくにつれ、拒みたくなる程嫌な夜会ではあるが、今回は唯一楽しみにしていた事がある。

エリーゼは自身の兄、フェルナンドから先日受け取ったドレスをまとい、姿見の前に立った。生地から兄と一緒に選んだものだ。

今まで毎回コルベール家で用意されるドレスは、夫から妻へ贈るとは名ばかりで、実際はタニアが選んだ物だった。

いくら女性物の服装に興味がないからと、愛人に選ばせた物を妻に着せるのは、多くの人が非常識だと思うはずだ。だが、今更彼らに常識を説いたところで、無意味だろう。

エリーゼはタニアが選んだと思われる、ケバケバしい色味やデザインのドレスを着せられるのが、いつも苦痛で仕方がなかった。

今まではずっとこれは、タニアからの嫌がらせの一環だと、思い込んでいた。だが、先日のタニアの化粧やドレスを目の当たりにして、とある可能性が頭に過る。

奇抜なドレスは、嫌がらせというより単にタニアの趣味なのではないか。光沢があったり、派手な色味のドレス、大ぶりのアクセサリー類。それらは皆彼女が好んで身に着けるものであり、彼女ならエリーゼよりもきっと似合うはずだ。

かといって完全な好意で選んだとも思えず、彼女の趣味を押し付けられる筋合いもない。エリーゼとタニアでは、そもそも好む物が正反対と言える。

（今まで贈られたドレスを、センスの悪いドレスという言い方をしていたけれど。あれらはタニアの好みだったのかしら？　申し訳ないけれど、私の趣味ではないのよ……）

成長期であるエリーゼには、今回彼らが用意するドレスでは確実にサイズが合わないのは予想が付いていた。

使用人経由でそれを事前に伝えていれば、今のサイズを測った上で、夜会用のドレスを用意して貰えただろう。ただしタニア好みの似合わないドレスを。

やはり自分で選んだ素敵だと思うドレスを一から作り、それを夜会で着てみたい。そう考えたから、敢えて黙っておいたのだった。

姿見に映し出されたエリーゼは、水色を基調とし、白と青のレースが施されたコルセットドレスをまとっている。後ろが編み上げになっており、エリーゼの細い腰やスタイルの良さをより際立たせた。

アクセサリーは細いチェーンに小振りの石がついた、控えめな物を選んだ。

髪はレナにお願いして、丁寧に編み込んだ後、ふんわりと結い上げて、サイドの髪も軽く巻いてもらった。自分でも、いつもより少し大人っぽい印象になったように感じる。

今のエリーゼは誰の目から見ても、完璧な若き貴族夫人の姿だった。

「エリーゼ様、とても素敵です！」

「ドレスも本当によくお似合いでっ」

「ありがとう、皆が手伝ってくれたおかげだわ」

侍女達は、自分達の女主人が美しく着飾った姿を目にして、はしゃいで喜び合った。エリーゼも頬を赤らめて照れた様子を見せつつ、純粋にとても嬉しそうだった。

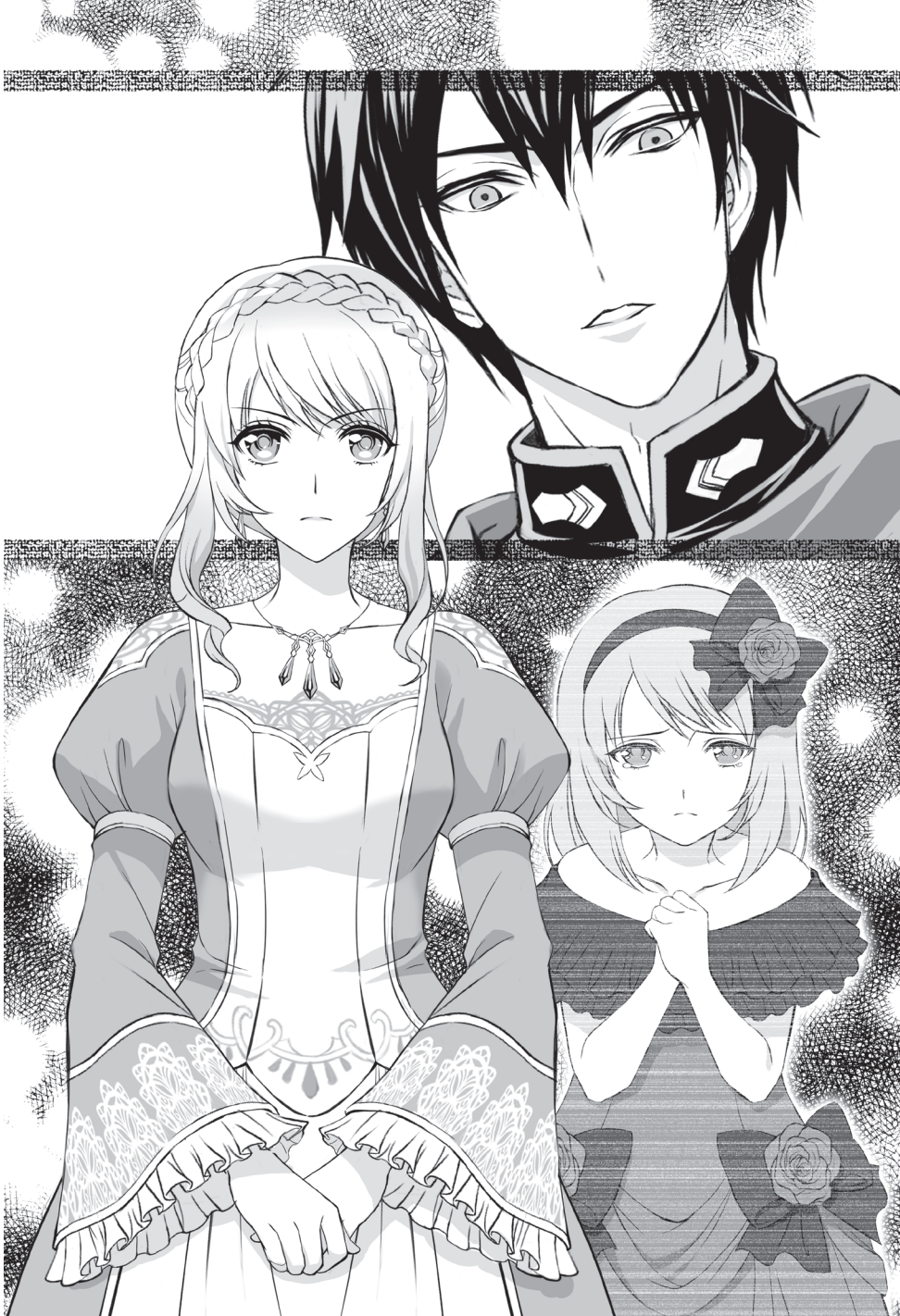
夜会の為の仕度を終えたエリーゼが部屋を出て、階段を降りていく。玄関ホールに向かうと、既に支度を終えていたアランが待っていた。アランは階段から階下へと降りてくる、自身の妻の着飾った姿を目に映すなり、息を呑み、一瞬で目を奪われていた。

まだコルベール邸のエントランスではあるが、アランは無言でエリーゼに腕を差し出す。今まではエスコートというと、会場に着いて入場する時の僅かな間だけだった。

一瞬驚き躊躇（ためら）ったエリーゼだが、エスコートを受け入れようと、彼の腕へと手を伸ばした。

エリーゼからは人工的な、キツイ香水の匂いとは違う、ふわりと控えめな花の香りがしてくる。

その事に気づいたアランは余計に隣のエリーゼを意識してしまった。



そして痩せ細って貧相だと思いこんでいたエリーゼは、確かに一見華奢ではあるが、実際は健康的な細さであり、何より豊かな胸もある。

感心したようにエリーゼの全身を眺めやるついでに、視界に入った首筋やうなじが妙に色っぽかった。アランは自身の妻が隣にいるだけで、胸が高鳴ってしまった。

馬車内では当然、いつものように沈黙が貫かれていた。お互い会話を交わそうとしないまま、ゴトゴトと走行する音のみが響く。揺られながら窓の外を眺めていると、ほどなくしてコルベール夫妻を乗せた馬車は、王宮へと到着した。

馬車を降り、再びエリーゼはアランにエスコートされると、揃って会場へ入場する。

広間に入ると天井には燦然と輝くシャンデリアが吊るされ、壁には精緻な模様や宗教画、そして燭台がふんだんに並べられている。

参加者の華やかな装いも一層、広間を煌びやかに見せた。

アランにエスコートされるがまま、会場を進んでいく。参加者の多くが、若きコルベール家の次期当主とその妻に視線を向ける。誰もがエリーゼの美しさに目を奪われた。

最上級の装いで着飾った人々の中にあっても、エリーゼはそこにいるだけで人目を惹く。

美男子の部類に入るアランと並べば、それだけで会場中の視線は自然と二人に集まった。

自分に釣り合うようになったエリーゼを連れて歩く事に、アランは悪い気はしない。それどころ

立ち読みサンプルはここまで